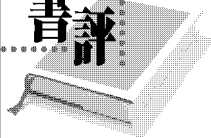


書評



保坂 隆 著

産業メンタルヘルスの実際

中村 純

私が産業医科大学に赴任した時、当大学の評議員をされていた西園昌久 福岡大学名誉教授から、産業医教育にはリエゾン精神医学の知識と経験を活かすことが重要だとの言葉をいただいた。私が産業医科大学に赴任した1998年から現在まで連続8年間、バブル崩壊後の不況や産業構造の変化など多くの複合的要因からわが国の自殺者は3万人を超えており、産業医にはメンタルヘルスの不調者への対応が必須となっており、産業医教育の責任を感じているところである。企業で働く人の自殺者は交通事故による死亡者数とほぼ同数であり、特に産業医学分野でのうつ病の早期発見・早期介入、復職への支援は重要な課題である。そこで、産業医にはより精緻な精神医学の知識や対応能力が必要である。保坂教授も精神科医として総合病院でのリエゾン・コンサルテーションサービスを実践された経験から、精神科医と一般医療機関の医師との連携(リエゾン)の重要性を認識されており、産業医活動をリエゾン精神医学の実践の場と考えられたと思われる。

本書では精神医学の知識が産業医にもわかりやすく解説されている。産業医の多くは精神科以外の医師であり、精神医学の知識を整理することは重要である。さらに本書では上司のメンタルヘルスへの理解、対応、休職から復職に至るまでの過程での産業医のかかわり方、精神科医としての産業医活動の役割などについても解説されている。

ところで本年4月から労働安全衛生法が改正され、月当たり100時間以上の超過勤務者に対

する医師による面接指導が義務化されたり、「心の健康づくりのための指針」の再検討がなされるなど、企業におけるメンタルヘルス対策が法制化されてきており、産業医によるメンタルヘルス対策は避けられない。産業医は、さまざまなメンタルヘルス不調による病態を早期発見して、さらに復職後のフォローアップをすることが重要な課題である。一方、治療者である精神科医が職場の実情を無視した診断書や職務制限を指導する内容の文書を発行する場合もあるため、治療者には企業環境や人間関係などを含めた理解が必要である。多くの精神科医は、患者の症状改善に視点を置いており、職場の状況をほとんど理解していない。特にうつ病の場合は、たとえ客観的評価としてハミルトンうつ病評価尺度で7点以下となり、うつ状態が改善したとしても、職場復帰に直接的につながるとは限らない。本人の自己評価を含めた評価がなされないと真の意味での寛解状態とはいえない。さらにうつ病は再発しやすい病であるため、復職後の適応や薬物療法の継続なども指導しなければならない。したがって、産業医と精神科医や心療内科医との継続的な連携が必要である。

本書は精神科医が産業医を対象にメンタルヘルス対策への理解を促すために書かれたものであるが、精神科医にとっても産業医学の理解を深めるための良い参考書になると思われる。

(産業医科大学精神医学教室)

●A5 126頁 2006 定価2,940円(本体2,800円+税5%) 診断と治療社